



# 男は 痛い !

國友万裕

第19回

起終点駅 ターミナル

## 1. 男と見られたくない

2月□日

京都みなみ会館で、『マンガ肉とぼく』という映画を見た。杉野希妃さんの監督・主演で、彼女が特殊メイクで丸々と太った女子大生を演じている。撮影が行われたのは京都なので、あちこちに見慣れた風景がでてきて、それも俺にはとても楽しかったが、何よりも共感したのは、このヒロインだった。

彼女は太ろうと努力する。普通の若い女性だったら痩せようとする人が多いのに、一生懸命太ろうとする。痩せてしまうと女という目で男から見られるから、それが彼女には耐えられないのである。

「この気持ちわかるなあー」。俺は、彼女の男バージョンだ。俺は女性に男と見られるのがいやである。男と見られると反発する。俺のこれまでの人生で俺を口説いてきた女性たちは、何か勘違いしていた。

大学の頃、俺をしょっちゅう誘ってきた女の子は、いつだって、涙ぐんだような顔で俺に迫っていた。彼女は何か悩みを抱えていたことは確かだった。だから俺にすがろうとしていた。最初からすがる目的の恋愛である。しかし、普通の男はこんな口説き方でなびくのだろうか。女の涙は武器だ。哀れっぽい目で男に追いすがると同じことなのに。脅迫するような女と男がつきあいたいと思っているのか。今思い出しても、恐怖の体験だった。

俺が30代の頃、他の男にセクハラされると訴えてきた女の子がいた。彼女は俺に自分の悩みを分かち合ってもらおうと思っていた。俺と一緒に、「その男、ひどいやつだね」と共感してもらおうと思っていた。一

般に女性は、誰か共通の嫌いな人をつくることで団結しようとする。でも、俺は女のそういうところが嫌いだ。中村先生によるとこういうのはモビングというのだそうだ。一丸となって、誰かを嫌う。俺はこれまでその女性の習性の餌食にされてきた男だ。そんな俺に「モビングに加担して」と甘えることで口説けると思っているのか。セクハラなんかだったら、女性に相談すればよさそうなものだ。女の性の悩みを男に聞かせようとするなんて、男へのセクハラだと思う。実際、あの時、俺はセクハラされている気分だったのだ。

俺が40代の頃、ブログをやっていた時期があった。そこに見ず知らずの女性がファンになって、俺にコメントするようになった。彼女は京都在住。30代半ばで男に振られたばかり。俺の顔も知らんのに、ブログを読む限りでは優しそうだし、同じ京都だからつきあえようと思ったらしく、毎日のようにコメントを入れて、モーションをかけるようになった。「あの人、確実に國友さんに気があるわよ。30半ばの女は焦るのよ。これ以上年をとると子供が産めなくなるから」と知り合いの女性から言われた。ある時、彼女は、「私、高校の時に、リストカットをしたことがある」と秘密のメッセージまで送ってきた。カチン！と俺は切れた。リストカットをするような女を男が好きだと思っているわけ！？俺はそういう女とは怖くてつきあえない！

やはり、女性たちもジェンダーに染まっている。弱い女を演じれば、男はそこから救ってあげたいという気持ちになる、彼女たちはそう思っているに違いない。そういう男もたくさんいるんだろうなあ。だけど、俺はそんな男じゃない。そんなわけで、俺は女が怖い。

女に恋愛や性の対象として見られたくないのだ。女は怖い！ 怖い！！ 怖い!!!

## 2. 息子と泳いだ日

3月□日

今年の春休み、久しぶりに専門学校で教えていた男の子と会った。彼とは Facebook でつながっていたのだった。

彼とは去年、一度は会って、ちょっとだけお茶を飲んだ。彼は専門学校から大学に編入し、今は営業の仕事をしているとのことだった。しかし、それきりで終わるだろうと俺は思っていた。ところがひよんなことから、また会うことになって、彼はスポーツマンで水泳もやっているの、ちょっとだけ泳いでから、メシでも行こうかということになった。

「先生、お腹出ていますよ（笑）」

「そりゃ、俺は52なんだから仕方ないよ」と話しながらプールの中を歩いた。

彼と俺はちょうど親子ぐらいの年の差だ。といっても、もう社会人になった息子と一緒にプールに入るお父さんはそうそういないだろう。俺は恵まれているなあー。二人で身体を動かし、あれこれ話をして、たらふく海鮮料理を食べて、立派な社会人になったもんだなあと思ったものだった。楽しいひと時だった。

こういうひと時を俺は小学校の頃から求めていたのだろう。しかし、発達障害的で浮いた存在の子だった俺は、友達をつくらうにもつくれなかった。俺はいつだって3軍の男だったのだ。1軍の男は勉強ができてスポーツマン。あるいは、喧嘩の強いガキ大将。2軍の男は、それなりに1軍のやつと友達になれる連中。しかし、変わり者で気が小さくて、

運動神経ゼロだった俺は、3軍の男で、女の子からもバカにされるようなタイプの連中としか付き合えなかった。学校はつまらなかった。学校という階級社会の中で、常に3軍でいなきゃならないというのは、自尊心を傷つけられる辛い日々だった。

小学校の高学年からはジェンダーにとらわれ、男の子の仲間にいることに抵抗すら感じるようになっていった。男になってしまったら、損をする、殴られる、理不尽な役割を負わされる。そう思っていた俺は男同士のつきあいを拒否するようになっていった。そこから俺の人生は大きく潮流からそれ始めたのだった。

でも、今は自分の息子ほどの年齢の男性と一緒にプールに入れる。俺は彼と会う前、俺は良くて彼のほうが一緒にプールに入ったりするのはいやがるのではないかと思っていた。しかし、まったく違和感なく、話はそういう流れになり、その後、食事の席でも気詰まりなく語り合えた。至福の時間だった。

彼だけじゃない。2月にもう一人、かつての教え子の男の子と焼肉にいつている。去年の春休みもスポーツクラブのインストラクターをしていたかつての教え子と温泉と寿司に行った。彼らはかつての教え子であり、もはや俺と利害関係はないので、無理に付き合う必要はない。だけど、彼らは俺とつきあってくれる。楽しい時を分かち合ってくれる。俺はもっと自分に自信をもっていいのかもしれない。これだけ若い男性と仲良く話せる50代のおじさんはそうそういるものではないだろう。そして、彼らは決して3軍タイプの男じゃない。一軍の男なのである。

しかし、未だに俺は自分に自信がないのだ。

いつだって、自分はつきあってもらっている。そういう気分で俺は生きてきたのだった。

### 3. 男同士のパフェ

4月□□日

突然、メッセージがiPadに届いていた。もう4年ほど前の教え子からである。彼は体育会のキャプテンで、俺になついてくれていた。東京で就職したのだが、今日はたまたま大阪に仕事で来たから、昼間だけ時間があるから、「一緒に飯でも」という連絡だった。新学期が始まったばかりで、大学の授業が始まっていなくて、まだその午後は時間があった。

高島屋の前で待ち合わせ、近くの寿司屋でたっぷり寿司を食べた。彼はすっかりビジネスマンになっていて、あれこれ仕事の話をしてくれた。今は超多忙だけど、しばらくは無理してでも頑張る気であるみたいだった。やはり体育会あがりのやつは目上の人と付き合うのがうまいし、爽やかである。俺は体育系になれなかったから、余計にまぶしく感じる。そういえば、俺よりも一回り年上の男性は、スポーツ万能だったにもかかわらず、体育系の活動はいつさいしなかったと言っていた。「僕たちの頃は、スポーツなんかやっているやつは、頭が悪いというイメージがあったんだよ」とのこと。へー、そうなのか。あの頃は学生運動もあつただろうし、長髪世代だから、スポーツよりもフォークソングのような雰囲気だったのかもしれない。俺は生まれた時期が間違っていたのか。俺から見ると、やはりスポーツマンはステキだ。

たらふく寿司を食べたあと、もうしばらく時間があるので、デザートでも食べるかということになり、パフェが食べたいというので、

新京極の有名なパフェの店でいちごパフェを注文し、二人で向かい合って食べた。昔の男だったら、男二人でいちごパフェなんて、嫌だと思ふやつが多かっただろう。しかし、今の若い男は平気だ。体育会の猛者であっても、さりげなく男同士でパフェが食べれる。やはり時代は変わるなあー

#### 4. 焼肉、風呂、ラーメン

5月□□日

飛び石連休の途中の平日、かつての教え子とぼったり会った。彼は学校の先生をしているのだが、運動部の顧問をしているせいか、日に焼けてますます精悍になっていた。彼も俺になついてくれていて、2年前にも偶然会ったときも、メシ、風呂、ラーメンと過ごした。

「あれから連絡がなかったし、Facebookも更新していないみたいだから、どっか他の街にでもいったのかと思ってたよ」

「いや、同じ学校で働いていますよ」

じゃあ、2年前と同じことをもう一度しようかということになり、次の週末に待ち合わせした。二人で焼肉に行った後、ラーメン、風呂、そしてかき氷で閉めた。若い男の子は、焼肉やラーメンが好きだ。風呂もつきあってくれる。彼は、好きな女の子がいるみたいで、もうそろそろ結婚することも考えているみたいだった。

彼と話していると結婚も悪くないなあと思えてくる。彼は俺のちょうど半分の年なのだが、もし20代の頃にこうやって一緒にメシや風呂につきあってくれる男の相棒がいたら、俺だって普通に結婚していたのかもしれないのだ。つくづく学校へ行かなかったブランク

は大きい。52歳になって、俺はやっと自分の息子ぐらいの子にたどり着いたのだった。

#### 5. ホモマゾ

東京大学の先生で女装ですっかり有名になった安富歩さんが、「ホモマゾ」という言葉を使って男の世界を表現していた。まさにこの言葉は的を射ている。ホモマゾとは、ホモソーシャル+マゾヒズムである。

男たちはホモソーシャルな男の世界で、女にはないような苦しみはたくさんあるけど、でも俺たちは男なんだから皆で痛みを共有しようねというマゾ的な快感を支えに生きているのだ。

安富さんはそういう世界からはおりたいから女装になったのだろう。俺は逆だ。俺はそもそもホモマゾの世界に入ったことがない。だから、未だに男同士でプールに入ったりという小学生のような友情をたっぷり味わいたいという段階に留まっている。俺が一軍の男たちと親密なつきあいができるようになったのは40代になってからであり、それまではそういう男の関心に憧れながらも、入れないがために、まるで同性愛のようにそういう関係に焦がれていた。40過ぎて、人間関係には恵まれるようになり、親密な友人関係を結んでくれる男性はたくさんできた。しかし、俺はまだ女性とのつきあいには躊躇している。

俺は子供の頃から、男たちが、平気でジェンダーを受け入れてしまうことがわからなかった。せつかく一生懸命働いてお金を稼いでも、妻や子供に吸い取られる。離婚なんてことになったら、子供は女にとられる。結婚なんて、女の術中にはめられる行為である。

おそらく、大概の男たちはそこまで考えて

いない。最初から一軍の男で、ホモマゾに生きてきた男たちは、結婚し、妻子を養うのが一軍の男のイメージだから、他の男もしていることだから、つらくても頑張ろうとホモマゾの理論で生きている。だけど、俺はホモマゾ理論を受け入れることができなかったのである。

今は、男性とのつきあいという部分ではホモマゾが受け入れられるようになったが、女性とのつきあいの部分ではまだできていない。なぜなのだろう？

去年の対人援助学会で、女性から理解されたくないという話がでた。ある若い男性が、女性に自分のことを理解してもらうのはむしろ不愉快だというのだ。分かる気はする。普通の男性はそうなのだろう。普通の男は、相手が妻や娘であっても、ある程度の距離は置いて、自分のすべてを知ってもらおうとは思っていないように見える。

俺は逆だった。俺はフェミニズムを一生懸命勉強して、女性を理解しようと努めてきた。だから、女性にももっと男のことをわかってくれと思ってしまい、わかってくれない女性とはすぐに喧嘩してしまう。これが俺が女性とつきあえない大きな原因である。

『男性は火星から、女性は金星から』という有名な本がある。俺たち男は火星、女は金星。だから分かり合えなくて仕方がないんだと割り切らなくては男女の関係は上手くいかない。

女性にわかってもらおうとする俺が間違っているのだ。もっと冷めた目で異星人として女性を見ることができれば、俺の女性恐怖はマシになるのだろう。考えてみると俺は、日本人の女性よりも外人の女性のほうに好感を

もってしまう。外人の場合だと文化のギャップがあるから、最初から理解してもらえない部分があって当たり前という気持ちで接しているからだ。しかし、日本人の女性だと、「なぜ、これくらいのことわからないんだ!!!」と俺は激昂してしまうのである。困ったものだ。

女性と喧嘩しないためには、俺はホモマゾにならなくてはならない。目一杯、他の男に同一化する。男たちと仲間意識を持つ。そして、女性は異星人だと思って、ある程度の距離を保つ。わかってもらえなくてもかまわないと割り切る。それが女性恐怖を防ぐ秘訣のようである。これからはそれを実践に移していかなくてはならない。

## 6.『起終点駅 ターミナル』(2015)

5月□□日

ホモマゾになりたいという思いもあって、シネコンで『64』の前編を見た。主演の佐藤浩市を筆頭に男性スターがたくさん登場する映画でまさしくホモマゾ。この映画のポスターを見ればわかるのだが、男たちは皆不機嫌そうな顔で写っている。不機嫌そうな顔をしながらも、これしか男の生きる道はない。煩わしい政治的な人間関係や家族とのしがらみに引き裂かれつつも、男という運命を生きている男たち。

俺は男の運命を受け入れることができなかった。そういえば、だいぶ前に中村先生から、「國友さんとつきあっているとすぐに傷つくから面白い」と言われたことがあった。俺は傷つきを表に出しすぎるのだ。普通の男は傷ついていても、それを表に出そうとしない。表に出さないのは問題だとこれまでの男性学

の人たちは訴えてきたが、俺みたいに表出的すぎてホモマゾに入れられないのも問題なのだ。

『64』は、久々に充実した邦画の大作である。タイトルの64とは、わずか7日間で終わった昭和64年のことだ。この時、天皇崩御のニュースに紛れて、ほとんど報道されることもなかった女兒誘拐事件に今も捕らわれ続ける男たちを描いている。昭和に取り残された男たちには、昭和は今も終わっていない。

俺にとっても昭和は終わっていない。俺は昭和が終わる時アメリカに留学中だった。したがって、あの時、日本がどういう様子だったのか全然知らない。あの時、俺が日本にいなかったのは、俺の人生は平成に変わっても、昭和のトラウマを引きずり続けることを暗示していたのかもしれないのだ。

俺は1964年生まれ。64という数字も因縁めいている。この映画との出会いは俺にとっては運命だったのかもしれない。

佐藤浩市の初老ぶりにうたた感慨である。佐藤浩市は、『起終点駅 ターミナル』（篠原哲雄監督）でも同じような役で出ている。これも昭和から平成にまたがる話なのだが、昭和の終わり、女性が突然自分の前で死んだことのトラウマに引きずられ、25年間、一人で暮らしていた弁護士が、新たな若い女性との出会いと別れにより、長年会っていなかった息子とも和解し、新たな人生を踏み出す話である。

「25年間、俺は逃げ込んでいただけだ」というセリフが出てくる。男は一度トラウマを追うとなかなかそこから抜け出すのに時間がかかる。女性の方が潔い。この映画でも、「私何もいらなくなっちゃったんです」「うらやましいよ。男にもそれができたらなあ」という

やりとりがでてくる。確かにノスタルジーという言葉は女よりも男に似合う言葉である。過去が好きなのは女よりも男だ。

佐藤浩市は55歳。俺より3つ上だが、渋みがでていい役者となった。彼のような男でも、四半世紀を超える時間、過去を引きずっているのだから、俺が過去をひきずっているのも異常なことではないだろう。

ただ残念ながら、男になれないことがきっかけでトラウマを背負う男の話は今のところ見つからない。この映画のように女を死なせてしまったことが原因という話はしばしば見られるのだけど。やはり、世間は女にトラウマを負わされた男よりも、女にトラウマを負わせた（女を死に追いやった）男の方に同情的なのである。

男は加害者でなきゃいけないなんて、そんなの変！ やはり男は痛い！！です。